

最初期の円筒印章について

須藤寛史

Hiroshi SUDO

A Brief Note on the Earliest Cylinder Seals

キーワード：前4千年紀、ウルク拡散、円筒印章、北方後期銅石器文化、南方ウルク文化

Key Words : 4th Millennium B.C., Uruk Expansion, Cylinder Seal, Northern Local Late Chalcolithic Culture, Southern Uruk Culture

はじめに

西アジアにおける印章の使用は、前7千年紀末、先土器新石器時代B後期のシリア北西部に始まる。土器新石器時代までには、容器や建物の出入り口を封印した封泥に押印され、内容物の保全、所有権の明示、物流の管理といった物資管理のシステムが確立する。

紀元前4千年紀には、新たな形態の印章、すなわち円筒印章が登場する。また同じ頃、品物の内容と数量を示すと考えられるトーケンを収めた中空の粘土塊、ブッラが、物資輸送の際の送り状として使用されるようになる。表面にはスタンプ印章や円筒印章が押捺され、その発送元の情報を示したと考えられている。

紀元前4千年紀は、南メソポタミアのウルク文化が周縁地域への影響を次第に強めていく時期である。

政治・経済的に発達している南メソポタミアが、未発達な周縁地域へ、貴重な鉱物資源獲得のために侵出していったというアルガーズのウルク・ワールド・システム論は(Algaze 1989, 1993)、その後の研究に大きな刺激を与えた。しかし近年の北シリア、アナトリアでの発掘調査の結果、高度に発達した南メソポタミア文化を未発達な周縁地域が受け入れていったという一方向的な見方に見直しが迫られている。1990年代の前4千年紀研究は、周縁地域における南方ウルク文化との接触の様相を発掘調査などによって実証的に検証し、アルガーズの「ウルク・ワールド・システム論」を修正・展開するという方向で進められてきたといえよう(Stein 1999; *Paléorient* 25/1 (1999) 所収の諸論文など)。

近年の発掘調査や過去の発掘資料の再分析により、アルスランテペ(Arslanape)、テル・布拉ク(Tell Brak)、テペ・ガウラ(Tepe Gawra)、ハジュネビ(Hacinebi)などでは、ウルク文化の影響が強まる前4千年紀中頃、ウルク中期後半(LC 4期)¹⁾以前に、土着社会における複雑化が独自に展開していたことが示されている(Frangipane 1997a,

1997b; Rothman and Peasnall 1999; Stein 1999など)。また、ウルク文化の拡散に伴って周縁地域に波及したと考えられていた円筒印章、およびその印影が、南方での出現とほぼ同時期に北方周縁地で層位的に出土している。このことから、北方における円筒印章が南方ウルク文化の進出とともに伝わったという見方を再検討する必要があると考えられる。

ウルク後期を遡る資料は南方でもわずかしかなく、層位的事実や出土状況などの情報はほとんど得られない。したがって円筒印章の初期の研究は、おもにウルク後期以降の資料を対象に、印影のモチーフの分析から当時の階層的な経済システムを明らかにすることが試みられてきた(Nissen 1977; Brandes 1979; Dittman 1986)。また、北方においてもウルク後期以前の例は近年まで知られていなかつたため、暗黙の了解として円筒印章は南方ウルク文化の波及に伴って流入したと考えられている観が強い。

本稿では、近年出土例が増加している北方におけるウルク後期を遡る最初期の円筒印章およびその印影の報告例を、出土状況およびコンテクストを中心に検討する。つまり北方における出現期の円筒印章の使用法を観察することで、それが南方から流入したものという従来の考え方を再検討しようとするものである。

南方ウルク文化圏における初期の円筒印章

一般に円筒印章は、南イラクのウルク(Uruk)や南西イランのスーサ(Susa)などの大規模な都市遺跡において、行政手続きの複雑化に伴って出現したと考えられている(Nissen 1977: 15-16; Collon 1996: 20)。ここではまず、南方における最初期の円筒印章の報告例を概観する。

1. ウルク

ウルク遺跡で円筒印章そのものが層位的な事実に基づいて出現するのは、アヌのジググラト(Anu Ziggurat)地区C-D層(ウルク中期後半から後期。LC 4-5期)からであ

る (Collon 1996: no. 5)。ドリルの穿孔によって彫刻されたもので、後述するスーサ・アクロポリス20層やシャラファバード (Sharaffabad) のものと類似する技法が使われている (Porada et al. 1992: 99)。円筒印章の印影はおもにエアンナ (Eanna) 神域のV層からIV層にかけて出土したものが最古のもので、ウルク後期 (LC 5期) にあたる (Amiet 1961: 23, Pl. 9-13; Brandes 1979)。

2. スーサ

イラン・スシアナ平原の大規模センターであったスーサで、ウルク中期前半 (LC 3期) にあたるアクロポリス20層から円筒印章の印影を持つ封泥があるという (Dittman 1986: 333; Porada et al. 1992: 99)。詳細については公表されていないため、ここでは以上の紹介にとどめる。

3. シャラファバード

年代比定がある程度確定しており、出土状況などの詳細がつかめる事例として、シャラファバードの例がある。スーサとならぶスシアナ平原のもう一つの大規模センター、チョガ・ミシュ (Choga Mish) 近郊の小村落である。遺跡の南東縁辺部に、長軸10m、短軸4m、深さ4m以上の巨大な長円形のごみ廃棄ピットが発見された。時期はスーサ・アクロポリス20層よりやや下るウルク中期後半 (LC 4期) にあたる。ここから多数の封泥が出土し、円筒印章の印影を持つものも含まれていた (Wright et al. 1980)。

円筒印章の意匠は、4種類あり、動物を描いたものと人間を描いたものが2種類ずつある。円筒印章が捺される封泥の使われ方としては、ドア・シーリング1点 (図1-b)、カゴ3点 (図1-c)、壺形土器の口2点 (図1-aと他1点)、壺形土器の頸部1点 (図1-d) である。他に何種類かのスタンプ印章も併用されているが、壺形土器への封泥に捺される印章は円筒印章のものだけである²⁾。

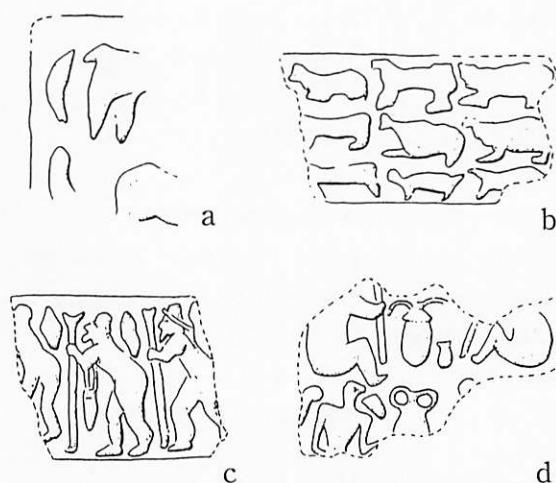


図1 シャラファバード、ウルク期ピット出土封泥
(Wright et al. 1980: Fig. 6) S=1/1

北方における最古の円筒印章

南方ウルク文化圏において円筒印章が出現するのは、以上の通り、ウルク中期前半のスーザまで遡ることが出来る。北方周縁地においても、近年の発掘調査により、きわめて早い時期から円筒印章が使用されていた事実が明らかになってきている。ここではテル・プラクの例を中心に、いくつかの報告例を概観する。

1. テル・プラク

シリア北東部ハブル川流域に位置するテル・プラクでは、TW区、およびHS1区で南方ウルク中期前半 (LC 3期) に併行する層位から円筒印章が押捺された封泥片が発見された。

遺跡の北部斜面に設定されたTW区16層では、「壁がんのある建物 (Niched Building)」が発掘された。報告者は出土遺物や建物自体の特異な特徴から、一般の住居ではないことを示唆している (Oates and Oates 1993: 174; Emberling et al. 1999: 6-8)。この建物の外部の床面から、円筒印章の捺された封泥片1点と、同一のスタンプ印章が捺された封泥片4点がキャセロールなど土着の土器と伴って検出された (Emberling et al. 1999: 8)。円筒印章の印影には魚、トカゲ、ヤギと、眼の偶像が縦横に並べられている (図2-a)。4点のスタンプ印章の封泥はなんらかの容器に施されたもので、座り込んだムフロンが4頭描かれている (図2-b)。また出土コンテキストは不明だが、TW区16層ではこの他に2点、同一の円筒印章が捺された封泥がある。四つ足の大型獣が描かれている。裏面の圧痕から、バスケットに施された封泥であることがわかる (図2-c, d) (Oates and Oates 1993: 178)。

テルの北西斜面にあるHS1区の南方ウルク中期前半 (LC 3期) に併行する層からは、9点の円筒印章の印影が認められる封泥片が見つかった (Matthews et al. 1994: 178-180)。5点はHS1区4層で発見された主要建築物外部の灰層から出土した (図2-e)。HS1区3層では細長い部屋が1室発掘された。壁の内側はプラスターが塗られ、壁がんも備えられている。この建物の床面から4点の円筒印章の印影が検出された (図2-f, g)。HS1区4、3層で出土する土器はTW区14~16層に類似し、BRBなどの南方の要素は見られない。封泥の裏面の様子では、多くの場合、移動可能な容器に施されたものようである。図2-cの裏面には、紐と木³⁾の圧痕が見られる (Matthews et al. 1994: 192)。印面に描かれている意匠は、動物、人間の列である。

HS1区ではまた、多数のスタンプ印章の印影が付いた封泥が出土しているが、そのうち1点、興味深い印影が捺された封泥が見つかった。一辺約3cmの方形の印影には、猛禽、ヘビ、四足動物がぎっしりと描かれている (Matthews 1996: Fig. 9)。報告者はこの印影について、スタンプ印章

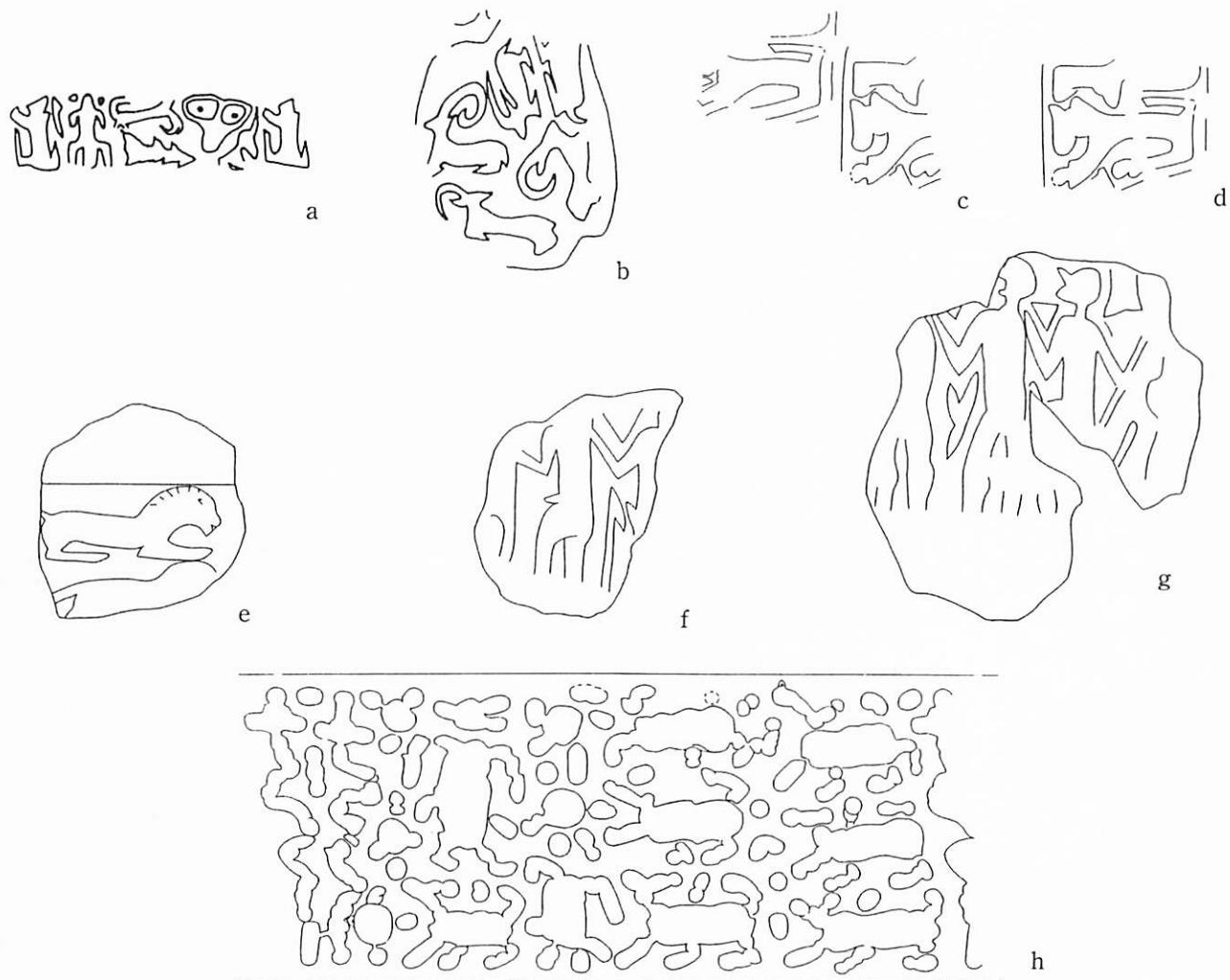


図2 テル・プラク出土封泥および円筒印章 S=1/1

- a : TW区16層出土円筒印章印影 (Emberling et al. 1999: Fig. 29/a)
 b : TW区16層出土スタンプ印章印影 (Emberling et al. 1999: Fig. 29/b)
 c , d : TW区16層出土スタンプ印章印影 (Oates and Oates 1993: Fig. 32)
 e : HSI区4層出土円筒印章印影 (Matthews et al. 1994: Fig. 4/2)
 f , g : HSI区3層出土円筒印章印影 (Matthews et al. 1994: Fig. 4/3, 4)

の印面の範囲で描くことのできる複雑な図像の限界点を示し、円筒印章の出現を予測させるものと述べている (Matthews 1996: 70)⁴⁾。

CH区12層は南方ウルク中期前半 (LC 3期)⁵⁾にあたり、ここからは円筒印章が押印されたブッラが確認された (Oates 1985: Pl. XXV)。ブッラとしては、後述するシェイク・ハサンと並び最古の報告例である。

時期がやや下った TW区13層は南方ウルク中期後半併行期 (LC 4期) にあたり、南方の影響が目立ち始める。建物の形態など詳細は不明だが、注口付き壺形土器、BRBなど南方ウルク中期の土器が広がる床面から、円筒印章そのものが検出された (図2-h)。方解石製の大形のもので (高さ4.5cm、直徑3 cm)、踊るクマ(?)、ヘビなどがドリル

によって描かれている。円筒印章自体が発見された事例としては最古のものであろう (Oates and Oates 1993: 176)。

ウルク後期 (LC 5期) になると、TWB区12層のピット群から円筒印章の印影を持つ封泥片が15点出土した。同一の印影を持つものが、まとまって同じコンテクストから出土するものもある (Emberling et al. 1999: Fig. 30)。

2. その他の報告例

北方においてはこの他、北イラクのテペ・ガウラ VIII層 (南方ウルク中期前半併行: LC 3期) で、骨製の円筒印章が発見されている⁶⁾ (Pittman 1999: 46)。しかしそまだ公表されておらず、詳細も未確認である。

ユーフラテス川中流域のテル・シェイク・ハサン (Tell Sheikh Hassan) では、ウルク中期前半 (LC 3期) にあた

る10層から、円筒印章の印影を持つ中空のブッラが3点、同一コンテクストで出土している(図3)(Boese 1986-87)。それぞれ、座って作業をする人、武器のようなものを持つ人、闘っているライオンが描かれている。そのうち2点には、円筒印章を捺したあとに、スタンプ印章が重ねて捺されている(図3-b, c)。

ブッラは、北方ではブラクで先述の通りCH区12層(LC3期)から、トルコ南東部ハジュネビでは、B2期(南方ウルク中期後半併行:LC4期)以降に見られる(Stein et al. 1996a: Fig. 18)。南方ではウルク・エアンナ神域V層(南方ウルク後期:LC5期)出土のものが最古である(Brandes 1979: Taf. 17-18, 22-24; Collon 1981-82: 178)。スーサではアクロポリス19-18層(ウルク中期前半～後半:LC3-4期)になって出現する(Dittman 1986: 334)。

最後に、ユーフラテス川上流域のテル・コサック・シャマリ(Tell Kosak Shamali)から出土した円筒印章がある。

遺跡東部斜面のB区で、ポスト・ウバイト期(前5千年紀後半～末:LC1期)にあたる第5層の整地層中の遺物集中地点から出土した。上下端の水平沈線文の間に斜格子文が描かれる(図4)(Nishiaki et al. 1999)。この時期に遡る円筒印章は他に例がない。当遺跡でも1点のみの出土であり、ここでは以上の紹介にとどめる。今後同時期の類例報告を待ちたい⁷⁾。

北方における初期の円筒印章、その利用法

以上、最初期の円筒印章の報告例を概観した。北方周縁地においては、LC3期の北シリア、テル・ブラク出土の封泥およびブッラに捺された印影が最古の証拠である。円筒印章の起源地と考えられていた南方においてはウルク中期前半のスーサ・アクロポリス20層(LC3期)出土の封泥が最古の報告例である。以上から、現状では円筒印章の出現期は南方ウルク中期前半(併行期)のLC3期とすることが出来る。

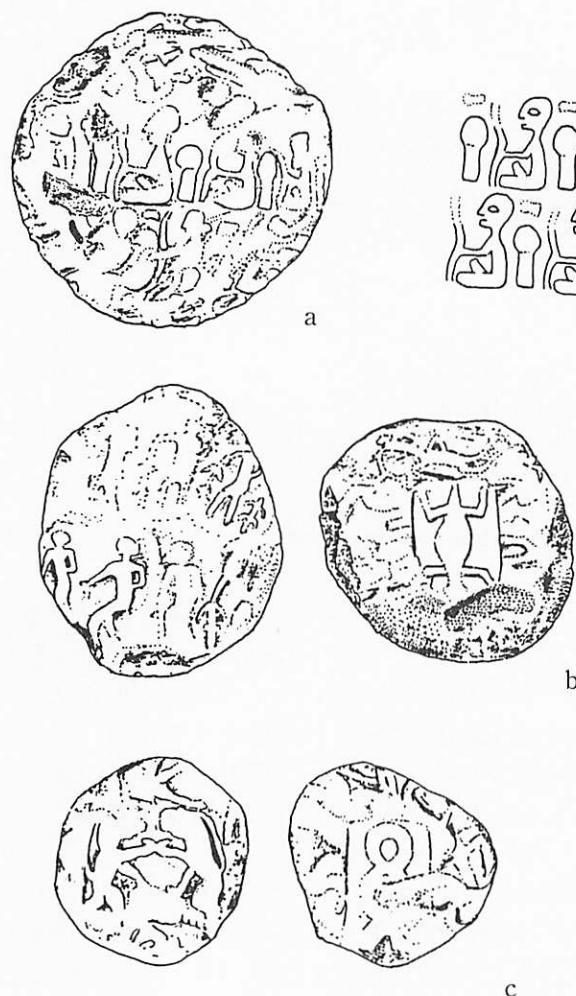
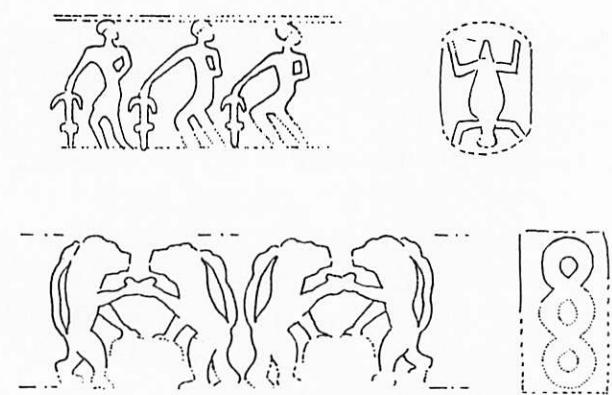


図3 テル・シェイク・ハサン10層出土中空のブッラ (Boese 1986-87: Figs. 37-39) S=1/1



図4 テル・コサック・シャマリ出土円筒印章
(Nishiaki et al. 1999: Fig. 17/11) S=1/1



ここで北シリア、テル・プラクにおける初期の円筒印章の利用法について改めて整理してみたい。

1. 北シリア（テル・プラク）における円筒印章の出現

テル・プラクでは、円筒印章の印影が付いた封泥が出現するのは、南方ウルク中期前半併行期 (LC 3 期) にあたる TW 区16層、HS1区 4、3 層である(図2-a～g)。この段階では、建築物外部の床面や灰層から、土着の北方ウルク中期土器が主体のコンテクストで出土している。スタンプ印章が捺された封泥が供伴する場合もある。封泥の裏面には、バスケットや木、紐の圧痕が確認されている。また同時期の CH 区12層ではすでに円筒印章が捺された中空のブッラが出土している。

ウルク中期後半(LC 4 期)になると、プラクでは TW 区13層で円筒印章そのものが出土している(図2-h)。注口付き壺形土器、BRB など、南方ウルク文化の土器と供伴している。ただし、プラクにおけるこの時期の使用法については封泥が報告されていないので不明である。同じ頃、イラン・スシアナ平原のシャラファードでは、円筒印章はドア、棚、土器（壺形土器）の口・頸部など様々なものに施された封泥に押捺されている。スタンプ印章も併用されるが、土器への封泥に捺されるのは円筒印章のみである。

以上をまとめると、最初期(LC 3 期)の円筒印章は土着文化のコンテクストにおいて使用されていたということができる。CH 区12層からブッラの出土も報告されているが、コンテクストの詳細は不明である。LC 4 期以降、南方からの影響が目立ちはじめると、円筒印章およびその印影は南方ウルク文化のコンテクストにおいて出土するようになる。

2. アナトリア（ハジュネビ）

ここで、トルコ南東部のハジュネビにおける印章、封泥などの物資管理・記録道具の様相を見たい。近年の発掘調査により、北方の土着集落の中に南方ウルク文化が入りこみながらも土着文化を維持し、異文化と共存している例が報告されている(Stein and Misir 1994; Stein et al. 1996a, 1996b, 1997, 1998; Stein 1999)。

ハジュネビは、おもに土器の分析から大きく3つの文化期に分けられている。A期（南方ウルク前期併行：LC 2～3 期）は南方ウルク文化との接触が無く、土着の後期銅石器文化が展開する。B 1 期（南方ウルク中期前半併行：LC 3～4 期）も南方との接触は見られず、A期の土着文化を引き継ぐ。B 2 期（南方ウルク中期後半併行：LC 4 期）になり、南方ウルク文化が流入するが、土着文化も維持される(Stein et al. 1996b: 97)。ハジュネビでは B 2 期、ウルク文化のコンテクストにおいて円筒印章の存在がはじめて確認される。斯坦やピットマンが印章、封泥などの物資管理・記録道具に関してこの時期区分に基づいて整理しており(Stein 1999; Pittman 1999)、北シリアでの動態

と比較すると興味深い。以下に概略をまとめる。

A/B 1 期において物資管理・記録道具に大きな変化は無く、近隣地域の土着文化と同様のスタンプ印章が使用されている。使用対象としては袋やカゴへの封泥が多く、まれに壺形土器の口への封泥になされることもあった。この時期はプラクの TW 区14～17層や HS1区 2～4 層と時期的に一部重なるが、円筒印章の存在は確認されていない。ただしこの段階のスタンプ印章は、焼成粘土や石灰岩製で粗い線刻が彫刻されたものと、石製で動物や人間の図像が入念に描かれたものという精製・粗製 2 種類の印章がある。前者は日常的なコンテクスト、後者は壁がんが設えられた石膏塗りの建築物から出土する(Pittman 1996, 1998; Stein 1999: 128)。

続く B 2 期には壺形土器への封泥、壺形土器の口を覆う封泥、中空のブッラ、粘土板が出土し、いずれも円筒印章が押捺されている(図5右)。南方ウルクの記録システムが一通り見られる。同時にアナトリア土着のスタンプ印章も使用され続けるが、これらは木製容器、アシで編んだ容器、革の袋、布製の袋への封泥にのみ捺される(図5左)。スタンプ印章が土器の封泥やブッラ、タブレットに使用されることはない。出土コンテクストも明確に分かれ、円筒印章が捺された封泥やブッラ、タブレットは南方ウルク土器を伴い、スタンプ印章はアナトリア在来の土器と供伴する。その逆のケースは、まったくといってよいほどない。南方ウルク文化とアナトリア土着文化が同じ遺跡で共存しながらも、経済的な面での交渉が少なかったことが推測される(Stein 1999: 155)。

円筒印章の起源地

ハジュネビでの状況を踏まえ、北シリアにおける初期の円筒印章の利用について考えてみたい。

まず、ハジュネビで最初に円筒印章の存在が確認されるのは、明らかに南方ウルク文化のコンテクストの中である。その使用法もブッラやタブレット、壺形土器の封泥など南方ウルク文化のものである。そしてハジュネビの土着の人々は南方の物資管理・記録システムを取り入れることはなかった。一方テル・プラクでは、南方との関わりが強まる以前の LC 3 期から円筒印章が使用されるが、土着文化コンテクストの中で、他のスタンプ印章と併用されていた。使用対象はバスケットや木製品への封泥である。壺形土器への封泥に捺されたという情報は、プラクの概報からは得られない。

以上から、テル・プラクにおいては初期の円筒印章は従来のスタンプ印章と大きな区別なく、土着のコンテクストで併用されていたようである。さらにこのことは、北方における円筒印章は南方から伝わったものではなく、この地

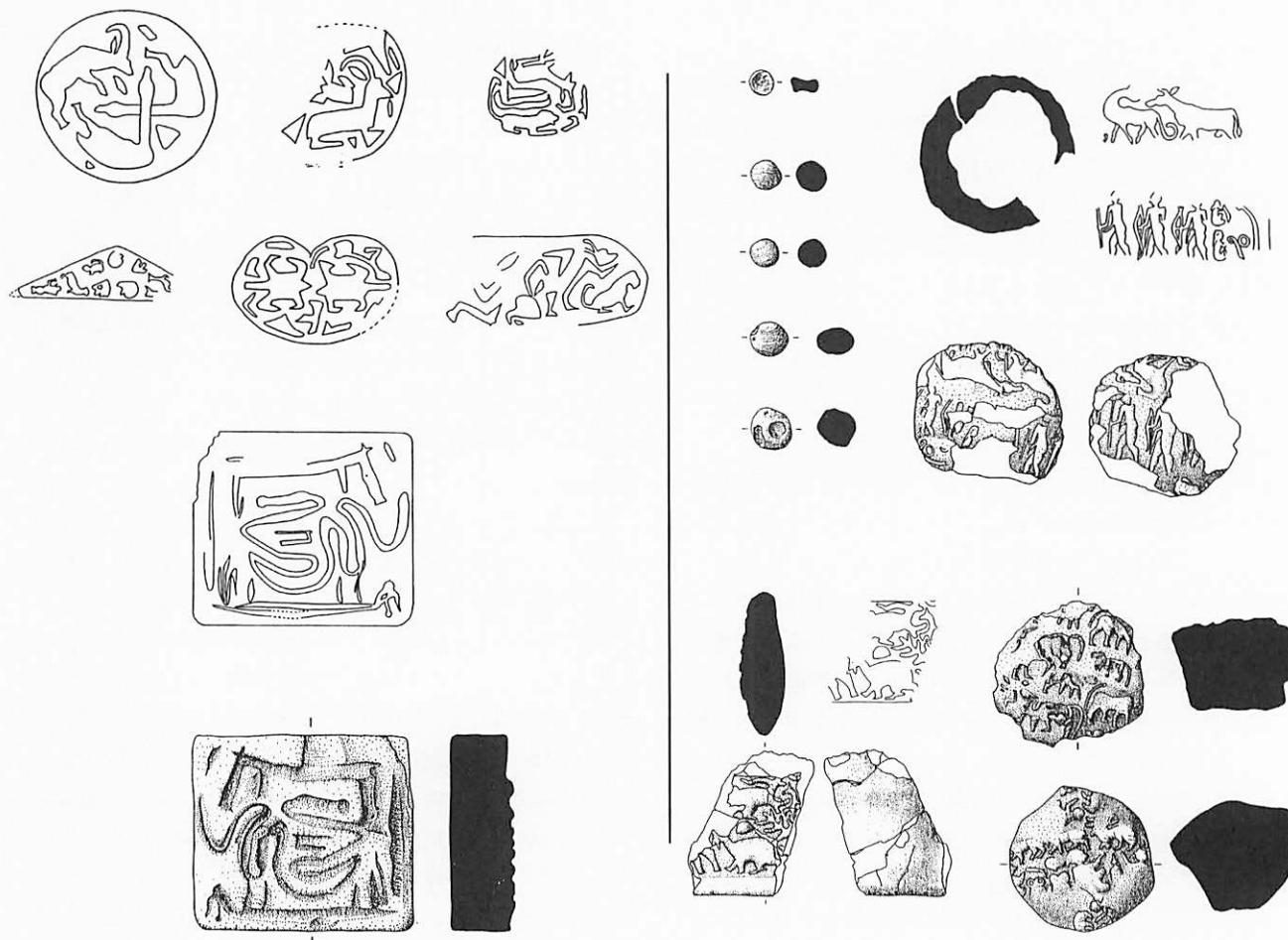


図5 ハジエネビB 2期の物資管理・記録道具 (Stein 1999: Fig. 7/12, 17)
左: 土着のスタンプ印影および封泥 右: 南方ウルク文化の円筒印影

において独自に出現し、使用されたという可能性を示唆する。しかし、ウルクやスーサにおける最初期の円筒印章およびその印影の出土状況などについて詳しい情報が得られないため、この点から円筒印章の起源地を断定することは出来ない。ただ、少なくとも円筒印章は、その出現期においてすでに、メソポタミア南部、南西イランといった南方ウルク文化圏だけではなく、北方周縁地においても独自のコンテクストにおいて使用されていたということは指摘できる。今後北方周縁地での層位的事実に基づく資料の増加により、円筒印章は、南方独自の文化要素という従来の見方を再検討する必要が出てくるであろう。南方の情報が得にくい今日において、周縁地における円筒印章のあり方を考えることは紀元前4千年紀の地域間の関係を明らかにする有効な手がかりの一つといえる⁸⁾。

おわりに

本稿では、周縁地における円筒印章の出現時期、および初源期の使用法について検討してきた。本来ならば印章の

モチーフ、スタンプ印章や封泥などその他の物資管理・記録道具などについて総合的に検討する必要があるのだが、本稿ではそこまで及ばなかった。今後、これらの点も含めて円筒印章の出現と紀元前4千年紀の地域間の相互関係をあわせて考えていきたい。

本稿を草するにあたり、多くの方々からご協力をいただいた。藤本強教授には早稲田大学での授業の折に常々ご指導いただいている。小泉龍人氏(東京大学東洋文化研究所)には、日ごろからご指導をいただき、また拙稿の投稿にあたり温かい叱咤激励をいただいた上に大変ご迷惑をおかけした。高宮いづみ氏にも同じく大変ご迷惑をおかけした。文献資料の調達では中近東文化センターの方々にお世話になった。西アジア考古学勉強会の参加者からは貴重なご意見、情報をいただいた。早稲田大学文学部考古学研究室の先生方並びに学兄諸氏にも多大なご協力をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

なお本稿は、2000年度早稲田大学特定課題研究助成費(2000A-081)の成果の一部である。

注

- 1) 本稿での遺跡の編年・年代は、1998年3月にサンタ・フェで行われたセミナー、“Mesopotamia in the Era of State Formation”の内容を掲載したウェブ・サイト (Rothman ed. 1998) に示されている編年案に準拠した。現在、前4千年紀の時期名称は地域ごとに多様なものが提唱されている。それらは、文化名と時期名を兼ねていたり、研究者間で認識のずれがあるなど混乱をもたらしている。このような時期名称の乱立による混乱を解消するため、ヘンリー・ライト (Henry Wright) による放射性炭素年代の再分析と Schools of American Research のメンバーによる土器、印章・印影の相対編年の再構築によって上記の編年案が提唱された。前4千年紀を5期に区分し、純粹な時期名称として古い方から LC (Late Chalcolithic) 1-5としている。遺跡間の各層位の帰属時期が明瞭になるという利点を優先し、本稿ではこの編年案に基づいた。通し番号による編年案は、フランスのリヨンの研究者たちによっても提唱されたが、時期区分の線引きが地域によって異なることもあるという問題点がある (西秋 1999: 100)。
- 2) ごく一部の発掘にとどまっているため、確定的な傾向ではない。
- 3) 木製容器だろうか。概報からは詳細は不明である。TW区16層の「壁がんのある建物」の床面から多数の炭化木材が発見されている (Oates and Oates 1993: 174)。ドアを木材で作ったことも考えられるので、ドア・シーリングであった可能性もある。
- 4) 前七千年紀末以来のスタンプ印章の長い歴史から、まったく形態の違う円筒印章が出現した理由として考えられるのは、印面の拡大ということであろう。物資管理・記録システムにおける手続きが階層化し、その処理に携わる各機関、各人を識別するために多様な意匠が必要になる。その際、円筒印章はコンパクトに広い印面を確保できるので効果的である (Nissen 1977)。しかしそれは複数の印章を同時に使用することでも解決できたのではないだろうか (Dittmann 1986)。コロンは前4千年紀後半、ブッラや粘土板など大型の対象物に押印する利便性をあげている (Collon 1990)。確かにブッラや粘土板に円筒印章が捺されることは多い。しかし本稿で見るよう円筒印章の出現はブッラや粘土板に先立つ。ここでマシューズ (Matthews) が方形のスタンプ印章について述べたということは筆者には興味深く思われる。方形であることで同じ長幅の印面の中で最大面積を確保することができるからである。結論を急ぐ問題ではないと思われるが、印面に描かれる情報量と印面の形態の関係について少し気にしておきたい。
- 5) 最初の概報では、CH区9-12層はウルク後期とされていたが (Oates 1985)、1994年の修正層位編年においてTW区14-16層と同時期の北方ウルク中期(南方ウルク中期前半。LC 3期)に修正された (Oates and Oates 1994)。
- 6) ブランデスは、ウルク出土の印影のもととなった印章が見つからないこと、ウルク出土の円筒印章が捺された印影がないことから、初期の円筒印章は木や骨などの朽ちやすい素材で作られたか、意匠の彫りなおしが行われたと考えている (Porada 1983: 476)。またコロン (1996: 20) は、初期の円筒印章の多くにはつまみがついており、動物の骨の末端部に似ていることから、最初は骨製であったと考えている。
- 7) 非常に似た資料が、ウルク後期(LC 5期)の殖民都市、ハブバ・カビーラ (Habuba Kabira) から出土している (Hammade 1994: no. 309)。
- 8) 南方と北方の関係を探る重要な資料として、「眼の偶像」('Eye idols') が挙げられる。「眼の偶像」は、前4千年紀の北シリア、北イラク、南東アナトリアの彫像や図像に特徴的なモチーフであ

る。前4千年紀後半に、南方ウルクの影響が強いコンテクストで多く見られる。しかしハジュネビやアルスランテペでは、南方ウルク文化と接触が活発化する以前の層位から出土している。このことから、スタインは「眼の偶像は」本来北方の土着文化要素であったものが、南方ウルク文化に取り込まれたと推測している (Stein 1997: 120)。また小泉は、このような眼のシンボルは北方ウバイド後期から終末期における北シリア・ハブル川以西の土器の文様にも見られ、この広範な地域における「祭祀ネットワークの普及を示す証拠」とし (小泉 1998: 177)、後続する時期においても眼をモチーフにした特殊な遺物は「ウルク・エンティティーとガウラ・エンティティーの関係を探る上で重要な遺物」と述べている (小泉 1998: 169)。

参考文献

- Algaze, G. 1989 *The Uruk Expansion : Cross Cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization*. *Current Anthropology* 30: 571-608.
- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System : The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Amiet, P. 1961 *La Glyptique Mesopotamienne Archaique*. Paris, Édition du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Boese, J. 1986-87 *Excavations at Tell Sheikh Hassan, Preliminary Report on the Year 1987 Campaign in the Euphrates Valley*. *Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 36-37: 67-100.
- Brandes, M.A. 1979 *Siegelabrollungen aus den archaischen Bauschichten in Uruk-Warka*. Freiburger altorientalische Studien 3. Wiesbaden, Franz Steiner Verlag GMBH.
- Collon, D. 1981/82 Review of Brandes, 1979. *Archiv für Orientforschung* 28: 177-181.
- Collon, D. 1990 *Near Eastern Seals. Interpreting the Past*. London, British Museum Press.
- Collon, D. 1987 *First Impressions : Cylinder Seals in the Ancient Near East*. London, British Museum Publications (久我行子訳 1996 『円筒印章—古代西アジアの生活と文明—』東京美術)。
- Dittmann, R. 1986 *Seals, Sealings and Tablets : Thoughts on the Changing Pattern of Administrative Control from the Late-Uruk to the Proto-Elamite Period at Susa*. In U. Finkbeiner and W. Röllig (eds.), *Gamdat Nasr : Period or Regional Style? Papers Given at a Symposium Held in Tübingen November 1983*, 332-366. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Emberling, G., J. Cheng, T.E. Larsen, H. Pittman, T.B.B. Skuldboel, J. Weber and H.T. Wright 1999 *Excavations at Tell Brak 1998*. *Iraq* 61: 1-41.
- Frangipane, M. 1997a A 4th-Millennium Temple/Palace Complex at Arslantepe-Malatya. North-South Relations and the Formation of Early State Societies in the Northern Regions of Greater Mesopotamia. *Paléorient* 23/1: 45-73.
- Frangipane, M. 1997b Arslantepe-Malatya: External Factors and Local Components in the Development of an Early State Society. In L. Manzanilla (ed.), *Emergence and Change in Early Urban Societies*, 43-58. Fundamental Issues in Archaeology. New York, Plenum.
- Hammade, H. 1994 *Cylinder Seals from the Collection of the Aleppo Museum, Syrian Arab Republic 2 : Seals of Known Provenance*. BAR 597 International Series. Oxford, Archaeopress.

- Matthews, R.J. 1996 Excavations at Tell Brak, 1996. *Iraq* 58: 65-77.
- Matthews, R.J., W. Matthews and H. McDonald 1994 Excavations at Tell Brak, 1994. *Iraq* 56: 177-194.
- Nishiaki, Y., T. Koizumi, M. Le Miére and T. Oguchi 1999 Prehistoric Occupations at Tell Kosak Shamali, the Upper Euphrates, Syria. *Akkadica* 113: 13-68.
- Nissen, H.J. 1977 Aspects of the Development of Early Cylinder Seals. *Bibliotheca Mesopotamia* 6: 15-23.
- Oates, D. 1985 Excavations at Tell Brak, 1983-84. *Iraq* 47: 159-173.
- Oates, D. and J. Oates 1993 Excavations at Tell Brak 1992-93. *Iraq* 55: 155-199.
- Oates, D. and J. Oates 1994 Tell Brak: A Stratigraphic Summary, 1976-1993. *Iraq* 56: 167-176.
- Pittman, H. 1996 The Administrative Artifacts. In Stein et al. 1996b, 98-100.
- Pittman, H. 1998 Preliminary Comments on the Glyptic Found in the 1997 Season at Hacinebi Tepe. In Stein et al. 1998, 170-173.
- Pittman, H. 1999 Administrative Evidence from Hacinebi Tepe: An Essay on the Local and the Colonial. *Paléorient* 25/1: 43-50.
- Porada, E. 1983 Review of Brandes, 1979. *Journal of the American Oriental Society* 103/2: 476-478.
- Porada, E., Hansen, D.P., Dunham S. and S.H. Babcock 1992 The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000-1600 B.C. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd ed., Vol. I, 77-121. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Rothman, M.S. and B. Peasnall 1999 Societal Evolution of Small, Pre-State Centers and Polities: The Example of Tepe Gawra in Northern Mesopotamia. *Paléorient* 25/1: 101-114.
- Rothman, M.S. (ed.) 1998 Mesopotamia in the Era of State Formation: School of American Research Advanced Seminar Summary. [Http://science.widener.edu/ssci/mesopotamia](http://science.widener.edu/ssci/mesopotamia).
- Stein, G. J. 1997 The Prehistoric Occupations at Hacinebi: Stratigraphy, Architecture, and Small Finds. In Stein et al. 1997, 112-121.
- Stein, G. J. 1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. Tucson, University of Arizona Press.
- Stein, G. J. and A. Misir 1994 Mesopotamian-Anatolian Interaction at Hacinebi, Turkey: Preliminary Report on the 1992 Excavations. *Anatolica* 20: 145-189.
- Stein, G. J., R. Bernbeck, C. Coursey, A. McMahon, N. E. Miller, A. Misir, J. Nicola, H. Pittman, S. Pollock and H.T. Wright 1996a Uruk Colonies and Anatolian Communities: An Interim Report on the 1992-1993 Excavations at Hacinebi, Turkey. *American Journal of Archaeology* 100/2: 205-260.
- Stein, G. J., C. Edens, N. Miller, H. Özböl, J.P. Edens and H. Pittman 1996b Hacinebi, Turkey: Preliminary Report on the 1995 Excavations. *Anatolica* 22: 85-128.
- Stein, G. J., K. Boden, C. Edens, J.P. Edens, K. Keith, A. McMahon and H. Özböl 1997 Excavations at Hacinebi, Turkey-1996: Preliminary Report. *Anatolica* 23: 111-171.
- Stein, G. J., C. Edens, J.P. Edens, K. Boden, N. Laneri, H. Özböl, B. Earl, A.M. Adriaens and H. Pittman 1998 Southeast Anatolia before the Uruk Expansion: Preliminary Report on the 1997 Excavations at Hacinebi, Turkey. *Anatolica* 24: 143-193.
- Wright, H.T., N. Miller and R. Redding 1980 Time and Process in an Uruk Rural Center. In M.T. Barrelet (ed.), *L'Archéologie de l'Iraq du début de l'époque néolithique à 333 avant notre ère : perspectives et limites de l'Interprétation Anthropologique des Documents*, Paris 13-15 juin 1978, 265-284. Paris, Édition du Centre National de la Recherche Scientifique.
- 小泉龍人 1998 『ウバイド文化における墓制の地域的研究—土器と墓から見た社会—』早稲田大学博士学位論文。
- 西秋良宏 1999 「西アジア銅石器時代編年の諸問題」近藤英夫編『古代オリエントにおける都市形成とその展開』97-102頁 東海大学文学部考古学研究室。

須藤寛史
早稲田大学文学部
Hiroshi SUDO
Waseda University